

超反動的 大量不当処分粉碎へ!



81.4.6

No.708

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八(動力車会館)
(鉄電)二九三五ノ六(公衆電話)三三二七二〇七

マル生型弾圧を粉碎し、断固たる闘いを貫徹しよう!

国鉄当局は、勤労千葉の三月ジェット決戦ストに対して、解雇4名を含む225名の全く理不尽極まる大量不当処分を強行してきた。

勤労千葉が9回支部代表者会議(冬)は、この不当処分強行に対し、断固之れを粉碎してゆく闘いへの決起を確認した。すでに、この才9回支部代で確認された方針にもとづく闘いが、4月4日の各支部における抗議集会・交渉交渉を皮切りに開始されている。

本日より開始される全組合員による減産闘争(8行動)と、本日17時30分より、4鉄局前で開催される「不当処分粉碎、81春闘勝利、46勤労千葉総決起集会」へ、さらに闘いを強化してゆこう。

明確な労働組合ツブシ

この不当処分攻撃に対して、我々は、まず何よりも勤労千葉の存在を認めず、勤労千葉を抹殺しようという権力中枢からの組織破壊攻撃であるという本質を見なければならぬ。

三月決戦までに勤労千葉を破壊せんとして「本部」反動分子を先女にかけられ、ついで「5510」「東務員運用合理化」「布施組織部長への解雇発令強行」等々の

真の労働運動を切り拓く政治闘争

この不当処分と相前後して、この向、権力・当局の攻撃と連動し、当局の勤労千葉破壊策動を補完するものとしての自らの立場を露骨に打ち出し、スト破り集団にまでなり下ってうづめ

ていた「本部」マル反動分子とその手先・土屋粹等は、スト破りを公然と居直り、勤労千葉の闘いをネジ曲げて誹謗中傷するのみならず、デマ情報を組合員宅へ郵送し、家庭訪問を行うなどの

攻撃、そして三月決戦闘争を通して勤労千葉を破壊しようとして土屋粹等のスト破りをも利用してかけられてきたスト破り助役村岡士導入——線見強行、三月決戦ストに対する「マル生型」攻撃策動等々の攻撃の延長上に、はっきりと「勤労千葉をツブせ」という権力・中枢の大号令によって突き動かされたこの不当処分攻撃があるのだ。

勤労千葉破壊策動を強めている。また、フルジョア・マスコミは、「読売」「朝日」の社説や「週刊新潮」のデマ記事に見られるように、いっせいに勤労千葉に対する非難キャンペーンを開始している。

これら、権力・当局、「本部」スト破り集団、マスコミの「勤労千葉批判」の唯一の主張は、要するに、「三月決戦闘争は政治ストである。」
「労働組合は政治ストをやる

べきではない」

「国労も勤労も鉄労も話かわかるのに、勤労千葉だけがわからぬのはけしからん」ということにある。「裏面資料」

だが、政治闘争を闘うことを不定した労働運動とは一体何か!

それは、あらゆる政治反動を容認し、憲法改廃、天皇制イデオロギーの押しつけ、軍事大国化、徴兵制、戦争等を全て認め、産業界に自らを投ずる以外の何ものでもない。

このようにここで「話かわかる」と鉄労とともにフルジョア・マスコミから称賛される「勤労」とは一体なにか。まさに、当局の武装親衛隊、合理化の尖先として、権力・当局に率先協力しているスト破り集団の姿を、権力・資本の側から公認されたという事以外の何ものでもない。

この「三里塚」政治闘争「勤労千葉」という構図に代表される「三里塚を闘う労働運動」こそが、賃金闘争も反動闘争も、そして社会変革の闘いをも叩きぬくことのできる

(ウラへ続く) ↓

4.6~8 怒りの減産闘争に決起せよ!

真の労働運動の最も確かな潮流なのだ。

マル生型現認体制をうち破れ!

この不当処分強行と同時に、勤労千葉の反撃に恐怖する当局は、「叩いを中止せよ」「ピラ貼りやスローガン書きには処分だけなら損害賠償を請求する」などという「通告」を行ってきた。

まさに、権力・当局のマル生型闘争圧殺、労働組合

破壊攻撃の始まりである。

マル生闘争を断固闘い、勝利した不退転の決意を再度うち固め、全員一丸となって「勤労千葉をツブせ」という密集した反動攻撃を粉砕してゆこう。

全この組合員の皆さん、

4月6日、17時30分、千葉局前に大結集をかちとり、勤労

千葉の団結と怒りの強さを示しめけ!

4月6日58日、減産闘争をはじめとするあらゆる叩いを、あらゆる戦術を駆使してもえ上らせよう。

駅、柵内区、電車区構内でのあらゆる現認体制をうち破り、英知をふりしげり、「反処分・反合・生活防犯・労農連帯」の春闘の勝利と固く結合し、全員が指令通りに、整然かつ断固として長期強靱な叩いを貫徹せよ!

本日4/6

不当処分粉砕
八一春闘勝利

局前総決起闘争へ

(17時30分、全支部根こぎ結集)

4月6日58日、
全組合員減産B行動へ!

但し、千葉以西国電南條
乗務員は、

各日とも0時12時B行動
12時24時A行動

資料

けたたましく開始された反動的キャンペーン!

だが、これこそ、政府支配者、当局、本部反動分子たちの一体化した焦りと悲鳴の表現だ。ゆが勤労千葉の三月シット決戦、政治ストの巨大な威力の前に腰をぬかしてしまった彼らの姿がますます鮮明に浮かび上ってくる。

社説

理不尽ストにけじめつけた国鉄

国鉄は、三日、国鉄千葉動力車労組に対し、シット燃料輸送阻止闘争に關与した組合員二百二十五人を処分すると通告した。解雇四人を含む処分の内容は、地域的なストについての処分としては異例の厳しさである。労働運動の限界を逸脱した闘争行為には、断固たる姿勢で臨むという国鉄の決意表明といつてよい。

新聞新説 (1981.4.4.)

その「量刑」の重さは、五十四、五十五春闘における闘争行為に対する一括処分と比較すれば明らかだろう。この処分は、国鉄ダイヤを全面的にマヒさせた二回の春闘ストをはじめとする計六回の闘争行為についてのものであるが、それでも解雇者は一括処分より、はるかに重たいといえる。

その理由は、千葉勤労の闘争の性格にある。千葉勤労は、「燃料輸送阻止」を叫んで、輸送列車の乗務員をストに入させただけでなく、当局側が、助役を動員して、輸送列車の運転を開始するや、これに抗議するとして、ストの輪を総武全線にまで広げたのである。運休旅客列車は、三月六日の全日ストだけでも千三百七十本にも上った。

これでは、千葉勤労は、自らの政治目的の達成のために、国鉄という公器を私物化したと批判されても仕方がない。当局側は、「今回の闘争は、新東京国際空港への燃料輸送そのものを阻止することを目的とした政治色の濃いものであり、極めて理不尽なもの」と非難するが、その通りだろう。

いうまでもなく、労使関係の軸となるものは、「団体交渉」である。新東京国際空港労働者といった政治的要求は、もともと労使の団体交渉になじむものではない。そうした政治目的のストは、原則的に、組合運動のわくを越えたものでもある。当局側がこれまでになく強硬姿勢をみせたのも当然なのである。

これに対し、千葉勤労は、減産行動などの「抗議行動」に出るというが、まったく筋の通らぬ話である。そもそも千葉

勤労のストは、こんな処分も覚悟の上のことではなかったか。これ以上、抗議行動などといって、なんの關係もない乗客を巻き添えにしてはならない。それだけでなく、国民の国鉄を見る目は非常に冷たい。昨年度の赤字は、単年度でゆうに一兆円を超えるという。それがすべて国鉄労使のみの責任ではないにしても、国鉄の企業努力に欠けるところがあるのも事実である。

国鉄が、その再建に全力を挙げなければならぬときに、なにがストかというのも国民感情である。とくに、その目的が政治的なシット燃料輸送阻止とあつては、国民の反感は強まるばかりだろう。こんなことでは、国鉄再建への国民の理解を求めるといっても無理な注文といえるものである。

なるほど、国鉄の再建には、労使の協力も不可欠の条件である。労使間に一定の信頼関係を構築する必要もある。そのためには、労使が徹底的に話し合い、妥協しあつても必要だろう。

しかし、それは、無原則的な妥協を意味するものではない。妥協できることとできないことのけじめは、はっきりとつけなければならない。よい労使関係は、そんな微しさのなかから生まれる。